

大相撲の危機と組織変革を考える 的地 修¹⁾

Considering the Crisis Involving the Grand Sumo Association and Its Organizational Changes

Osamu MATOJI

Abstract

The world of Sumo is suffering from a significant decrease in the popularity which is caused by numerous issues including Sumo wrestlers' violence, baseball gambling, and rigged games. In order to make reforms in the traditional systems, the Japan Sumo Association, a national federation of managing the wrestlers, decided to (1) rely on the ideas and knowledge provided by external specialists and informants and (2) work earnestly in recovering the current negative image of Sumo which is Japan's national sport.

Key words : Japan Sumo Association, rigged games, Japans' national sport

1) 競技スポーツ学科

はじめに

大の相撲好きだった昭和天皇が、戦後初めて当時の国技館（蔵前）に足を運ばれたのは昭和30年（1955年）の5月場所だった。この「天覧相撲」の折り、陛下が詠まれた歌に「久しくも見ざりし相撲ひとびとと手をたたきつつ見るがたのしさ」がある（相撲歳時記，1980）。戦後の復興を経て平和の時代が訪れた喜びをこの歌に詠まれたものだが、大相撲の昭和史を紐解くと、相撲が国技として発展するのに皇室とのかかわりを抜きにして語ることはできない。

優勝力士に天皇賜杯が贈られるようになったのは大正14年（1925年）からである。昭和天皇が皇太子のころ、当時の東京大角力協会に寄付金を下賜されたのを機に賜杯が作られ、東西にあった協会が一本化し大日本相撲協会が設立された。以降、現在の天皇賜杯を争う優勝制度が確立した。相撲の歴史はもっと古く、日本書紀には天皇の命令で野見宿禰と当麻蹴速の二人の力士が争った様子が描かれ、これが相撲の起源とされている。相撲が日本古来の文化であり、歴史と伝統を受け継ぐ「国技」として大きく発展してきた背景にはこうした天皇、皇室との結びつきが強かったからともいえる。

とくに昭和に入り、69連勝の不滅の大記録を打ち立てた双葉山から栃錦、若乃花が覇を競った栃若時代、さらに大鵬、柏戸の柏鵬時代から平成に入って兄弟横綱で土俵を風靡し



図1 人気の低迷を象徴するように幕下力士の取り組みは空席が目立つ

た若乃花、貴乃花の若貴時代、曙、武蔵丸、朝青龍らの外国人横綱の台頭で相撲人気は隆盛を誇ってきた。しかし、数年前から力士の暴行死事件や大麻所持問題、人気力士らの野球賭博、さらに八百長問題が次々と明るみに出て独特の相撲社会は、その根底から揺らぎ始めた。大日本相撲協会は昭和41年（1966年）に日本相撲協会として改称されたのち、国から公益法人として認められた。税金面での優遇措置も受けているが、相次ぐ不祥事からその公益性に厳しい批判の目が向けられている。

伝統と歴史という独特の文化の上に胡坐をかき続けてきたつけは、あまりにも大きく、閉鎖的かつ独善的な体質は自浄能力さえも失いつつある。組織の改革が急務になり、古い体質の社会にも知識人や企業人の外部の「知」が導入され、旧来の部屋制度や年寄名跡といった相撲界の根幹にかかわる組織運営や構造の見直し機運が高まってきた。力士出身者による内輪の組織から透明性のある現代社会に即した「開かれた組織」へ生まれ変わるといういわば、民主化の大きなうねりである。「待ったなし」といわれる大相撲の再生と改革をメディアの報道から考えてみた。

1. 大相撲は伝統文化かスポーツか

「大相撲はスポーツではない」という声をしばしば聞く。十両以上の関取が結う大銀杏、化粧まわしや横綱の土俵入り、行司の装束などは総じて「歌舞伎」の世界に相通じるものがある。日経新聞の12月6日付のコラムに歌舞伎役者の澤村田乃助さんが相撲と歌舞伎の交流にまつわるエピソードとして投扇興（とうせんきょう）を紹介していた。公家の遊びのひとつで、1疋ほど離れたところから座ったまま、扇を投げて桐箱の台座（枕）の上にある蝶のような鈴のついた的に当て、扇と蝶と枕が作り出す形の優雅さによって点数を競う遊びである。歌舞伎では、土俵仕掛けにして本格的な4本柱の上に屋根をかけ、行

司は独特の装束に身を包み、たっつけ袴の呼出しまでそろえた。昭和の名横綱といわれた双葉山がこの投扇興を気に入り、自分の住まいを兼ねた料亭に専用の投扇興の土俵をつくったという。歌舞伎と気脈を通じた時代の話だが、相撲が伝統芸能といわれるエピソードでもある。

神事をルーツにする相撲は、伝統文化の要素を保ちつつ発展してきた日本独特のプロスポーツである。天皇賜杯を争う現在の優勝制度が確立されてからは、はっきりしたルールのある格闘技を巡業や本場所といった形の興行を定期的に行ってきたからこそ、国民の人気を得て、国技として支持された。相撲ファンは土俵が醸し出す独特の雰囲気を好み、人並み外れた力自慢の大男たちが土俵で勝負を競うことに熱狂する。歌舞伎役者をひいきにするのと同様に人気力士や所属する相撲部屋を物心両面で支えるタニマチは、江戸時代に大名がひいき力士を抱えたことから由来するが、こうした歴史的な風習を伝承してきた相撲の伝統文化性は、つきつめれば力士という存在そのものにある。江戸時代にさかのぼると勸進相撲は、神社仏閣の改修資金を集めたり、大火事にあった町の復興を支援したりするために催された。農村では古くから豊作祈願の神事として奉納相撲があり、赤ん坊を力士に抱いてもらうと丈夫に育つという言い伝えは現在でも残っている。

皇室のお墨付きともいえる天皇賜杯を下賜され、大相撲がプロスポーツとして隆盛を極めるのは昭和に入ってからである。伝統を伝えていくために保守的な部分、例えば、番付といった昔ながらの独特の階級制を残しつつ、現在のような運営が定着するのは1950年代終わりから60年代にかけてである。不安定だった力士の給料が月給制になり、地位に応じて支払われる職能給と褒賞金が確立された。もっとも、その給与体系は十両以下の力士では、わずかな小遣い程度しか支給されず、十両に昇進して初めて給与を手にするこ

とができるといういわば徒弟制度のような側面は現在も踏襲されている。相撲の世界では「番付一枚違えば、虫けら同然」といわれるが、健康保険もなかった非近代的な組織運営は、ある意味では伝統文化を隠れ蓑にして「相撲のことは相撲取りでなければ、わからない」という独善的で旧態依然のままの社会を築き上げた。

ここ数年来、相撲界は土俵の内よりも土俵の外のトラブルが相次いだ。若手力士の暴行死事件にはじまり、外国人力士の薬物事件、横綱の暴行疑惑は引退騒動にまで発展した。大勢の力士による野球賭博が明るみに出て大関や部屋の親方らが解雇され、警察の捜査が進むうち押収された携帯電話に残された力士同士のやりとりから八百長問題が発覚した。八百長にかかわった疑いのある力士25人が追放という前代未聞の処分にもまで広がった。相撲界が他のスポーツの世界よりも厳しい目で批判されるのは、力士が所属し相撲の興業を手がける日本相撲協会が国から「公益法人」として認められ、税金面など特別な優遇措置を受けているからであり、それゆえ社会のルール、秩序を常に守る姿勢が求められている。公益法人の認可を受けている大きな理由は、相撲が国技としてその伝統と文化を受け継いでいる価値が社会に認められてきたからである。しかし、古い体質、古い考えの組織

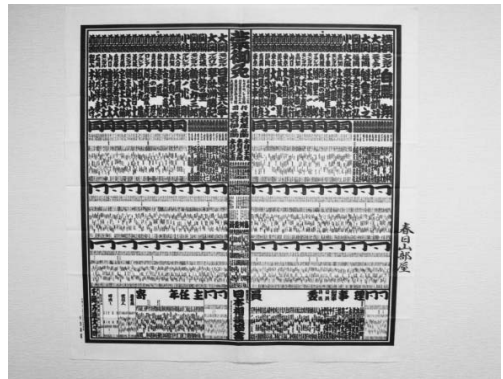


図2 伝承文化の象徴でもある独特の相撲字で書かれる番付表は、1757年（宝暦7年）から記され続けている

は、急激に変貌し始めた社会に対応できなくなり、かつては機能していた伝統的な仕組みや制度に大きなひずみが出始めた。稽古という名の暴力やとばくの蔓延、さらに星のやり取りなど非社会的な力士らの振る舞いは、相撲が合わせ持つスポーツとしての競技性、伝統を担う文化性のどちらをも失いかねない危機を招いてしまっている。

2. 進まぬ体質改革

大きな社会問題にまで発展した相撲界の後に絶えない不祥事の事後対策とあわせて日本相撲協会はもう一つの大きな問題にも直面している。国の制度改革で、すべての公益法人は2013年11月末までに新しい公益法人としての認可を受け直さなければならなくなった。いままでのように税金など特別扱いを受けていくために、大相撲が「公の利益のために行われているか」が改めて問われている。相撲社会を支えてきた部屋制度と現役引退後に協会職員として残るための身分保障といわれる年寄名跡（親方株）制度の改革など旧体質にメスを入れなければならなくなった。功績のあった横綱が引退するときに与えられる一代年寄りを除いて親方株は105と数が限られるが、一度手にすれば、引退後は65歳の定年までの収入や身分は保証されるので、昔から力士同士の間で売買の対象になってきた。今年7月の名古屋場所開幕を前にした6月5日の朝日新聞社説は「親方株問題に取り組み」という相撲界の組織改革につながる提言をした。1970年代に1千万円程度だった親方株は、80年代に億単位に跳ね上がり、借金をして買ったという例を紹介した。96年に故二子山親方（元大関貴ノ花）が名跡取得の取引に絡んで国税当局から購入資金の申告漏れが指摘され、約3億円で売買されたことが明るみに出て大きな社会問題になった。この申告漏れ問題を重視した当時の境川理事長（元横綱佐田の山）は親方株の売買を禁止し、協会が管理する対策案を打ち出したが、「自分の手

で自分の首を絞めるようなもの」と他の親方たちの猛反発から頓挫した。指導者としての能力や協会、相撲界に貢献できる人材の評価よりも札束を積んで引退後の保身を考えるのが第一という閉鎖的な相撲界の体質を物語る出来事だった。

相撲界独特のこの年寄名跡は、これまで日本相撲協会という組織を支える最も重要な仕組みのひとつである。名跡はもともと弟子の中から部屋の将来を託すに値する力士に対して親方から授与されるもので、その前提として親方はその力士と養子縁組をし、力士は親方の姓を名乗り、息子となる。その代りに親方の老後の面倒をみる。古風ともいえる継承制度は戦後も続いてきたが、社会の多様化とともに親方も力士も考え方が大きく変わってきた。師匠と弟子という関係は希薄になり、名跡の譲渡に担保としての現金のやりとりが当たり前になった。日体大名誉教授の稲垣正浩氏（スポーツ史）は「情よりは金に信を置く、現代社会の病理が大相撲の社会にも浸透している。大相撲という伝統文化を支える人間の多くが拝金主義に走り始めた」と指摘した（2011・6世界174-175p）。

こうした相撲界の旧体質を見直し、協会改革を検討するために2010年7月に日本相撲協会の第3者機関「ガバナンス（組織統治）の整備に関する独立委員会」が発足した。大学教授や企業経営者、マスコミ関係者ら外部の意見を取り入れた改善策は2011年5月にまとめられ、協会に提言されたが、年寄株の売買禁止や外部理事の増員など協会運営の根幹に関わる改善策には協会内部から難色を示す声が多かった。公益財団法人への移行に求められるのは、協会組織の透明性であるのに、不透明さが指摘されていた年寄株の売買については従来通りのままで独立委の禁止案は受け入れられなかった。億単位といわれる年寄り株を借金までして手に入れた親方らにとっては、引退後の死活問題につながりかねないために難色を示したといわれる。年寄株を持って

ば、協会から65歳の定年まで安定した給料を受け取れ、生活費はもちろん力士の養成や部屋運営にも充てる経費が保障される。「年寄株の売買は、会社でいえば正社員になるために金でその権利を取引しているということ。資金力のある者だけが残り、力士の指導や協会、部屋の運営にあたるということが問題。そんな組織は一般社会では通用しない」と独立委や文科省関係者は厳しい批判の目を向ける。しかし、相撲人の代表で構成する理事会や協会幹部から積極的な体質改善の動きはなかなか出てこない。10月19日付の日経新聞の「大相撲待ったなし」の記事に、年寄株改革について親方のだれもが「難しい。時間がかかる」とした実情をレポートし、相撲協会内に発足した公益法人制度改革対策委員会の深沢武久委員（元最高裁判事）のコメントとして「相撲が発展していくためには、親方衆も血を流さないといけない」と紹介した。会議での話しの行きつく先がいつも親方の今後の生活になると問題のむつかしさを提議したうえで、多額の借金までして得た個人財産（年寄株）に踏み込まれる改革に、親方衆らが強く反発していると改革の舞台裏を追及した。さらに30代から60代までいる親方の世代間の格

差にも触れ、借金の多い中堅、若手の親方らが定年近い一部の古参理事らによる改革の主導に不満を募らせている実情も明らかにした。2013年11月末の移行期間まで2年足らず、暗礁に乗り上げた形の迷走が続いている。

3. 明日への提言

2011年の相撲の本場所は3月、5月（技量審査）の2場所が開催されず、地方巡業も中止になった。

1場所5億円といわれる放映権料が見込まれるNHKのTV放映も中止や改編があり、相撲人気の大きなかけりは、大幅な収入減につながった。2011年10月20日付の日経新聞によると、11年度の事業収入は30億円以上減り、大幅な赤字が見込まれると報じた。現金などの流動資産もここ3年間で48億円も減っていることが明らかになった。人気回復が急務になってきたものの、危機感がなかなか伝わってこない。国技館の土地、建物や預貯金など時価にして相撲協会の財産は約400億円にのぼり、ここ数年続く赤字はそこから補てんされているが、身内で身内を管理する今のままでは協会の存続は厳しくなると指摘する声は強い。全国紙で一連の不祥事など相撲取材を続けるA記者は、相撲協会の現状にこう苦言を呈した。「公益法人は協会を存続させる最低条件でしかなく、失われた相撲への信頼を取り戻すには、抜本的な改革が必要である。角界という特殊な環境の中で『これまででもこうやってきたんだ』というあしき前例の踏襲を続ける限り、相撲の未来は先細りだ。自分たちが社会においてどういう立場に置かれ、どう見られているのか、客観的に現状を把握し、内からの改革の潮流が起きないとだめだ」

A記者から東京都内に相撲部屋を開いた親方の一例も聞いた。協会から部屋には土俵の維持管理、幕下力士一人につき年180万円が支給される育成など弟子10人で年間2100万円の収入がある。「月50万円のローン返済があり、力士の食費が毎月40万円かかる。水道や

表1 大相撲界の出来事

年	大相撲の現代史（昭和以降）
1925	東京、大阪の相撲協会が合併し大日本相撲協会設立 天皇賜杯がつくられ、現在の個人優勝制度が確立
1928	NHKのラジオ放送開始
1939	横綱双葉山の連勝記録が69でストップ
1953	NHKのテレビ放送開始
1958	栃錦、若乃花の栃若時代到来。7月の名古屋、11月の九州場所を加えた6場所制がスタート
1966	日本相撲協会に改称 力士の月給制や年寄りの定年制、役員選挙など組織改革が始まる 柏戸、大鵬の柏鵬時代に相撲人気が高まる
1985	両国・国技館完成
1995	若乃花、貴乃花の兄弟横綱による若貴時代で空前の人気
2006	朝青龍らモンゴル勢が台頭。
2007	朝青龍が横綱の品格を問われて2場所出場停止 時津風部屋で若手力士の暴行死事件
2008	大麻事件で外国人力士3人が解雇
2010	朝青龍が暴行事件疑惑で引退 野球賭博事件で大関琴光喜らが引退 7月の名古屋場所のNHK放映が中止
2011	八百長事件で力士、親方ら25人が引退、辞職 3月場所の開催中止

光熱費も40万円近くかかり、医療費の負担が年間100万円を超す。若手の力士が引退すると自立するまで専門学校の学費を出すなど面倒を見ると、協会からの補助金だけでは部屋の運営はできない」という。現在、相撲部屋は50あるが、弟子が10人以下の部屋が24もある。改革案のなかに部屋を30ほどに減らす案があるが、未来の担い手が減る現状では、相撲そのものの存続さえも危ぶまれる。

「ガバナンス（組織統治）の整備に関する独立委員会」のメンバーを務めた中島隆信・慶応大商学部教授は「ビジネスとしてのスポーツ」（一橋ビジネスレビュー2009SPR）の大相撲の経済・経営学のなかで、「77億円もの余剰資産があるのなら、墨田区やJR東日本と提携して両国国技館周辺への再開発を提案してみてもどうだろう。大相撲発祥の地という割にはあまりにも国技館周辺の雰囲気は雑然としている。町が相撲と一体化していないのである。本来ならば、JR両国駅を降り立ったとき、あるいは浅草橋方面から歩いてきて両国橋を渡り終えたとき、『ああ、相撲の街にきたな』と人々に実感させる演出が必要なのである」と訴える。さらに「八百長の根絶も結構だし、再発防止委員会も必要だろう。しかし、協会は本務にもっと精を出すべきである。大相撲をどう魅力的に演出するかについて外部理事から適切なアドバイスを受けるこ

とは大いに歓迎すべきことである。不祥事を起こしたからその対策として外部の人を入れるという後ろ向きの対応ではますます大相撲の行く末は暗いとみるべきである」と述べている。要するに協会や親方ら自らが自浄努力に立ちあがらない限り、伝統文化を担う相撲界の明日は見えてこない。

まとめ

昭和50年代（1960年代）の大相撲を2年近く取材したことがある。輪島。北の湖。貴ノ花のスター力士が土俵を盛り上げ、その後は53連勝の快挙を成し遂げ国民栄誉賞を受賞した千代の富士が全盛時代を築いた。満員御礼の垂れ幕は途切れることがなく、国技としての相撲は華やかで土俵に華を添える木村庄之助ら行事や呼び出しまでも人気があった。

相撲を担当すると朝が早い。力士は朝6時に起床し、朝食抜きで稽古するから取材も早くなるのだ。10両以上の関取は8時頃から稽古を始めるが、それまでは若い力士の猛稽古が続く。竹刀でたたかれ、土俵の土にまみれ、もうろうとしながらも我慢、辛抱する。「かわいがる」といわれるしごきが当たり前だった。今なら悪しき慣習といわれかねないが、当時は伝統が脈々と息づく独特の世界であった。そんな相撲界が近代化の波をもろに受けて変貌し始めた。平成に入ると相撲はいち早くポードレス時代に入りモンゴルやグルジア、ブルガリアなど外国人力士が幕内の半数を占めるようになった。異文化はしきたりなど長年に亘って受け継がれてきた相撲の風習や文化の価値を変え、食生活にも変化をもたらした。ファーストフードを好む若手力士が増え、稽古を終えるとパソコンやテレビゲームに夢中なる。メールのやり取りを交わす携帯電話は必需品になった。野球賭博や八百長問題の発覚は、携帯電話のやりとりがきっかけで起こるべきして起こった。現代文化の波に相撲界全体が翻弄されてしまったのである。お相撲さんの定番といえば、ち

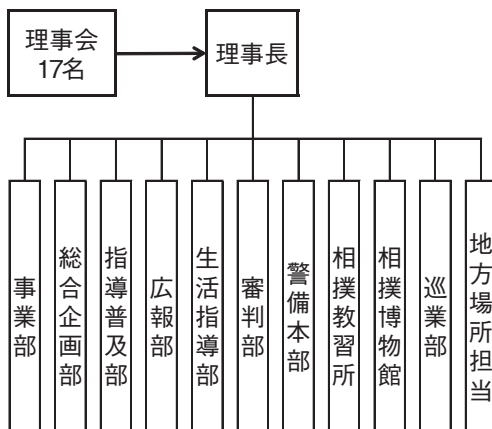


図3 日本相撲協会組織概略図

ゃんこなのに牛丼，ハンバーガー，カップめん，スナック菓子などコンビニやファーストフーズでの食事が当たりまえになった。「稽古は昔の三分の一程度，きつくやったり，厳しく叱ったりすれば，すぐにやめてしまう」という愚痴はあちこちの部屋から聞かれるという。相撲界の改革を問うのと同時に相撲界全体が現代社会の流れに対応できる組織なのか，文科省や有識者，ファン，メディアを含めて知恵を出しあい，再構築する必要がある。そうした声に相撲人が真摯に耳を傾けない限り，真の改革案は生まれてこないだろう。

参考・引用文献

- 1) 稲垣正浩 (2011) 大相撲真の再生への提言. 世界, 6月: 174-175.
- 2) 北出清五郎, 水野尚文 (1980) 相撲歳時記. TBSブリタニカ: 東京.
- 3) 中島隆信 (2009) 大相撲の経済・経営学. 一橋ビジネスレビュー, 56 (4): 32-43.
- 4) 朝日新聞社説
2010年6月17日
- 5) 朝日新聞スポーツ面
2011年5月14日
- 6) 朝日新聞記者夕論
2011年11月26日
- 7) 日経新聞スポーツ面
2011年5月20日
- 8) 日経新聞スポーツ面
2011年10月18-21日
- 9) 毎日新聞分析解説面
2010年7月5日

